第九部　わざわいの書
（原題：ヒゼキヤ王治世第 14 年の危機に瀕しての宣告）
イザヤ 28 章〜35 章

□第九部のアウトライン

			「わざわいだ」
A)	**アリエルの苦難**	**28〜29 章**	28：1、29：1、29：15
B)	エジプトとの同盟に対する警告	30〜31 章	30：1、31：1
C)	正義の王による統治	32 章	
D)	イスラエルの避難	33 章	33：1
E)	諸国民に対する神の怒り	34 章	
F)	イスラエルの回復	35 章	

□はじめに

1. わざわいの書とは

28 章から 35 章は、「わざわいの書」とも呼ばれる。「わざわいだ」ということばが 6 回登場するからである。

最初の 5 回は、北王国イスラエルや南王国ユダの指導者たち、または将来のイスラエルの指導者たちに対して、「わざわいだ」と語られる。最後の 1 回は、将来、大患難期のときに現れる「反キリスト」に対して、「わざわいだ」と語られる。

2. 預言の範囲は

28 章から 35 章には、イザヤが預言者として活動した期間中に成就した預言もあるし、まだこれから成就する、大患難期やメシアの王国に関する預言も含まれる。

3. ヒゼキヤ王治世第 14 年（紀元前 701 年頃）の危機とは

紀元前 701 年頃、アッシリア軍が南王国ユダになだれ込んで来て、町々を攻め落とし、最後にエルサレムを包囲して総攻撃をかけようとしたが、主の介入によって阻止された出来事。この記事は 36〜39 章、Ⅱ列 18：13〜19：37。

4. この危機の原因は何か

北王国イスラエルがアッシリアに滅ぼされたのは、紀元前 722 年頃。そのときから 21 年経過。この間、南王国ユダはアッシリアの属国状態であった。その屈辱から脱するために、ヒゼキヤ王はエジプトと同盟を組んでアッシリアに対抗しようとした。その動きが、アッシリア軍の攻撃という危機を招いた。28 章から 35 章は、その危機に際して告げられた預言である。

5.　エジプトとの同盟を神はどう見たか

ヒゼキヤ王がエジプトと同盟を組もうとしたことは、神のみこころではなかった。そのことは、「B)　エジプトとの同盟に対する警告」で語られる。

たしかにアッシリアの属国状態となったのは良いことではないが、そもそも先代の王アハズが隣国からの脅威を受けたときに、神に頼らず、アッシリアに助けを求めたのが誤りであった。アッシリアの属国になってしまったのは、神のさばきでもある。

ヒゼキヤ王は神のさばきの前に身を低くして、神に信頼し、アッシリアのくびきから解放される時を待つべきであった。にもかかわらず、エジプトと同盟を組んで、エジプトの力を借りてアッシリアに立ち向かおうとした。

6.　このヒゼキヤ王と同じ過ちを、将来のイスラエルの指導者たちも

神に頼らず、有力な国を頼みとしてしまうという過ちを、将来のイスラエルの指導者たちもおかしてしまう。

それは、反キリストとの同盟条約締結である。この同盟条約は当初、同盟期間を 7 年間と約定するが、3 年半を経過した時点で、反キリストは世界を支配するにあたり、イスラエルを裏切って条約を破棄し、逆にイスラエル民族を圧迫するようになる。その圧迫の期間は 3 年半、イスラエル民族にとって、かつてない苦難の時となる。

その苦難の時を終わらせるのが、メシアの再臨である。反キリストとの同盟条約締結から 7 年、この 7 年間を聖書は「主の日」と呼び、神学上は「大患難期」と呼ぶ。イスラエルのみならず、全世界に大きな患難が及ぶ期間という意味である。

7.　死とよみの契約

「A）アリエルの苦難」の預言の中では、反キリストとの同盟条約締結を「死とよみの契約」と呼ぶ。イスラエル民族の多くを死に至らしめ、よみに追いやるからである。アリエルとはエルサレムの別の呼び方のひとつである。

□「　A）アリエルの苦難　」のアウトライン（イザヤ 28～29 章）　　資料ページ

1.　わざわいだ、エフライムの誇りと飲酒（28：1～6）・・・・・・・・・・・71
2.　南ユダも同じ問題に（28：7～13）　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・72
3.　死とよみの契約（28：14～22）　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・73
4.　二つのたとえ話（28：23～29）　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・75
5.　わざわいだ、アリエルよ。おまえが倒れる（29：1～4）
6.　アリエルの敵も処罰される（29：5～8）
7.　イスラエルの指導者たちの盲目ぶり（29：9～12）
8.　イスラエルの民の偽善（29：13～16）
9.　イスラエルの民族的救い（29：17～24）

A)　アリエルの苦難　28～29章

1.　わざわいだ、エフライムの誇りと飲酒（28：1～6）

(1)　1～4節　**わざわいだ。エフライムの酔いどれが誇りとする冠、その麗しい飾りの、しぼんでゆく花。これは、酔いつぶれた者たちの、肥えた谷の頂にある。見よ、主のもとには激しく力強いものがある。それは、突き刺さり荒れ狂う雹の嵐のようだ。激しい勢いで押し流す豪雨のようだ。主は御手をもってこれを地に下される。エフライムの酔いどれが誇りとする冠は、足の下に踏みにじられる。肥えた谷の頂にあってこれを麗しく飾る花もしぼみ、夏前の初なりのいちじくの実のようになる。だれかがそれを見つけると、すぐに手に取り、呑み込んでしまう。**

- 「**エフライムの酔いどれが誇りとする冠**」・・・エフライム（滅んだ北イスラエル）の問題は、誇りと飲酒
- 「**激しく力強いもの**」・・・アッシリア
- そのような彼らを、アッシリアは労することなく「**すぐに手に取り、呑み込んで**」しまった。

(2)　5節　**その日、万軍の主は、民の残りの者には輝かしい冠、栄えの飾り輪となり、**

- 「**その日**」・・・、将来のメシア王国の時代
- 「**民の残りの者**」・・・イスラエルの残れる者、信仰あるイスラエルの民、レムナント。この文脈では特に、北王国イスラエルにいた十部族の子孫たちの中で、信仰ある残りの者たちである。彼らは誇りと飲酒の冠を付けるのではなく、主が彼らの輝かしい冠となり、力となってくださる。

(3)　6節　**さばきの座に着く者にはさばきの霊となり、攻撃して来る者を城門で追い返す者には力となられる。**

- 裁判官となる者には主が「**さばきの霊**」となって公正なさばきを行わせてくださる。
- 都の城門を守る者には主が「**力**」となってくださり、メシア王国での平和を維持する働きをする。

2.　南ユダも同じ問題に（28：7～13）

(1)　7～8 節　**しかし、これらの者も、ぶどう酒でよろめき、強い酒でふらつく。祭司も預言者も強い酒でよろめき、ぶどう酒で混乱し、強い酒でふらつく。幻を見ながらよろめき、さばきを下すとき、よろける。どの食卓も吐いた物であふれ、余すところもない。**

- 「**しかし、これらの者も**」とは、滅んだ北イスラエルから目を転じて、南ユダを見ると、である。エフライムの飲酒と同様、南ユダの祭司や偽預言者たちも飲酒に溺れている。

(2)　9～10 節　**「彼は知識をだれに教えようとするのか。知らされたことをだれに悟らせようとするのか。乳離れした子にか。乳房から離された子にか。彼は言っている。『ツァウにツァウ、ツァウにツァウ、カウにカウ、カウにカウ、あっちにゼエル、こっちにゼエル』と。」**

- 南ユダの指導者たちのことば。「**彼は**」とはイザヤを指す。イザヤの預言を聞いて、「**彼はだれに知識を教えようとするのか。乳離れした子にか**」とイザヤを嘲っている。自分たちを子ども扱いして偉そうに語るイザヤの預言など聞く耳を持たない、という反感のことばである。
- イザヤの声は、指導者たちにとっては、全く理解できない、外国語のような音でしかない。その音は、**『ツァウに・・・ゼエル』**と聞こえ、全く意味をなさない。

(3)　このような指導者たちに対する主の応答（28：11～13）

11～13 節　**まことに主は、もつれた舌で、異国のことばでこの民に語られる。主は彼らに、「ここに憩いがある。疲れた者を憩わせよ。ここに休息がある」と言われたのに、彼らは聞こうとしなかった。主は彼らに告げられる。「ツァウにツァウ、ツァウにツァウ、カウにカウ、カウにカウ、あっちにゼエル、こっちにゼエル。」これは、彼らが歩くときうしろに倒れて砕かれ、罠にかかって捕らえられるためである。**

- 神のことばを聞こうとしない不信仰者たちに対しては、神は異国のことば、舌がもつれたような音のことば、意味のわかないことばで告げられる。
- 波線部は彼らに対するさばきの宣告

3.　死とよみの契約（28：14～22）

イザヤは当面の重大案件であるエジプトとの同盟について 30～31 章で警告するが、その前にここでは、将来イスラエルが反キリストと結ぶ同盟について預言する。

ただし、同盟の相手が反キリストであるとはまだ明らかにされない。それが明らかになるのは、ダニエル 9：26～27 の預言を待たねばならない。

イザヤの預言では、「死と契約を結び、よみと同盟を結ぶ」という表現にとどまる。

(1)　将来、エルサレムでイスラエルの民を治める指導者たちに対する警告（28：14～15）

14～15 節　**それゆえ、嘲る者たちよ、主のことばを聞け。エルサレムでこの民を治める者たちよ。あなたがたがこう言ったからだ。「われわれは死と契約を結び、よみと同盟を結んでいる。たとえ、洪水が押し寄せても、それはわれわれには届かない。われわれは、まやかしを避け所とし、偽りに身を隠してきたのだから。」**

- 指導者たちは、イスラエルの安全を保障してくれる、頼りになる相手と条約を結ぶことができたと喜ぶが、実のところ、「**死と契約を結び、よみと同盟を結んでいる**」（15 節）、すなわちイスラエルの人々を死なせ、よみに行かせるような相手と同盟を結んだのである。
- 指導者たちは、「**たとえ、洪水が押し寄せても、それはわれわれに届かない**」、すなわち、たとえ大軍勢が押し寄せても、それはイスラエルに攻め込むことはできないと安心しているが、その安全を保障してくれる相手は、実は「**まやかし**」であり、「**偽り**」である。

(2)　そのような指導者たちや彼らに従う多数の人々とは別に、少数ではあるが、反キリストとの同盟条約による政治的・軍事的安全保障に期待せず、メシアに期待するレムナントがいる（28：16）

16 節　**それゆえ、神である主はこう言われる。「見よ、わたしはシオンに一つの石を礎として据える。これは試みを経た石、堅く据えられた礎の、尊い要石。これに信頼する者は慌てふためくことがない。**

- 「**試みを経た石、堅く据えられた礎の、尊い要石**」とは、メシアのことである。

(3)　イスラエルが反キリストと条約を結んだあとの3つの出来事（28：17～22）

①　条約は破られる

17～18節 a　**わたしは公正を測り縄とし、義を重りとする。雹はまやかしの避け所を一掃し、水は隠れ家を押し流す。あなたがたの、死との契約は解消され、よみとの同盟は成り立たない。**

②　イスラエルが攻撃される

18 b～20節　**みなぎる天罰が押し寄せると、あなたがたはそれに踏みにじられる。それは押し寄せるたびに、あなたがたを捕らえる。しかも朝ごとに押し寄せる。昼にも夜にも。この知らせを悟るなら、ただ恐怖あるのみ。まことに、寝床は身を伸ばすには短すぎ、覆いも身をくるむには狭すぎる。」**

③　神のさばきのむちが、全地に下る

21～22節　**実に、主は起き上がられる。ペラツィムの山での時のように。主は奮い立たれる。ギブオンの谷での時のように。みわざを行われるが、そのみわざは不可思議。働きをされるが、その働きは意外。だから今、あなたがたは嘲ってはならない。あなたがたを縛るかせが、きつく締まることのないように。私は万軍の神、主から、全世界に下る定められた全滅について聞いているのだ。**

- **ペラツィムの山での時**・・・ダビデ王がペリシテ人を破った（Ⅱサム5：17～21、Ⅰ歴14：11）
- **ギブオンの谷での時**・・・ヨシュアがアモリ人を破った（ヨシュア10：7～10)。ダビデ王がペリシテ人を2度目も破った（Ⅰ歴14：13～16）

4.　二つのたとえ話（28：23～29）

23 節　**あなたがたは、私の声に耳を傾けて聞け。私の言うことを注意して聞け。**

イザヤはこう呼びかけてから、神のさばきがいつまでも続くわけではないことについて、二つのたとえ話を語る。

(1)　耕すことのたとえ話・・・いつまでも耕すという辛い作業が続くわけではない＝いつまでも神のさばきを受けるわけではない。収穫をもたらすべく種を蒔くときが来る＝イスラエルが回復され、約束の地に戻る日が来る（28：24～26）

24～26 節　**農夫は種を蒔くために、いつも耕してばかりいるだろうか。土地を起こし、ならしてばかりいるだろうか。その地面をならしたら、ういきょうを蒔き、クミンの種を蒔き、小麦を畝に、大麦を定まった場所に、裸麦をその境に植えるではないか。農夫は厳しく指導され、彼の神は彼に教える。**

(2)　打穀することのたとえ話・・・作物それぞれに打穀の仕方がある。あるものにはきつく、あるものには柔らかくする。そしていつまでも打穀するわけではない。神のさばきも、あるものには厳しく、あるものには守りを与える。そして神のさばきにも、終わるべき時がある（28：27～29）

27～29 節　**ういきょうは打穀機で打たれず、クミンの上では脱穀車の車輪を回さない。ういきょうは杖で、クミンは棒で打たれるのである。パンのために麦は砕かれるが、打穀をいつまでも続けることはしない。脱穀車の車輪を回すことはしても、馬がこれを砕くことはない。これも万軍の主のもとから出ること。その摂理は奇しく、その英知は偉大である。**

- 「**その摂理は奇しく**」・・・別訳「不思議な助言者」、これはメシアの呼称のひとつ（イザヤ 9：6）である。